



条

3月5日

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

3月5日のおはなし「条」

とおくから白い幕が近づいたと思ったら、何千条もの雨になった。

虫取りをしていた子どもたちがいっさんに駆け出すがちまち夕立ちにつかまってしまう。風が強まり、たとえ傘をさしていても横なぐりに大粒の雨が当たる。バケツをひっくり返したような、とよく言うが、これは風呂桶をひっくり返したようなと言えればいいか、明神池をひっくり返したようなと言えればいいか、常軌を逸した雨だった。

目を凝らせばしぶき飛び散る視界のずっと向こう、大牟田山のあたりには青空が見え、むくむくとまっ白な入道雲が上へ上へと伸びている。こっちは夕暮れかと思うほどに暗くなっているのに、あっちは夏の昼の光が勢い良く跳ね回っている。金森がそれを指差し何か言うがさっぱり聞こえない。西倉が笑い出す。おれも笑い出す。頭のとっぺんから足の先までずぶぬれだ。お互いの顔もよく見えない。声も聞き取れない。でもあっちには鮮やかな青天がある。笑うしかない。

それでもこりずに金森が何か言おうとしているので、こっちも、何だって？ と怒鳴るようにしながら耳を近づけた。自分で喋った声も聞こえやしない。バス停のベンチに座ったまま全身濡れ鼠のおれたちのまわりは雨音で騒然としている。びしゃびしゃびしゃとたたきつけるような雨音がベンチの座面からも、足元からも、バス道からも、目の前の田んぼからも立ち上がり、沸き立っている。どこかの家のトタン屋根を打ち付ける音は激しいドラムソロみたいだ。え？ え？ と何度も聞き返すうち、いきなり眩しいような光が目を射して、間髪入れず、ばーんと轟音が炸裂した。雷だ。おれたちは三人とも大笑いしてベンチの上でひっくり返りそうになった。

前触れもなく始まった夕立ちは、これまた突然やんだ。びしゃびしゃびしゃびしゃっ！ と言ったかと思うともう後はなし。一切なし。遠ざかる雨のカーテンも、徐々に遠ざかる音もなし。自分の耳が聞こえなくなってしまったのかと思うほどの静寂。不安になる前にまず日が差し、すぐさま蝉が鳴き始める。何事もなかったかのように。おれたちが濡れ鼠のままなことで、あたり一面水浸しなのを除くと、雨なんてどこにありましたっけ、てなもんだ。

西倉が、もうすぐバスが来ると言い、金森はバッグをかついだ。本当はおれは金森を引き止めに來ていたのだが、もうどうでもよくなっていた。でも夕立ちが来るまで熱弁を振るっていたこともあり、何を言っていたかわからなかった。何を言おうか考えていたらさっきのことを思い出して聞いてみた。

「さっき、何を言おうとしちよったん」

「あれさ」金森はさっき指差していた大牟田山をもう一度指差した。「おめ、ガキンころ、あれ、何ち呼んじよったか、つて聞きおった」

「ああ」それはおれたちが三人組を結成するきっかけになった山だった。ガキの頃からこれまで続いた三人組の、その最初の最初があこの山だった。おれがあこの山にあだ名をつけ、それを面白がった金森と西倉が山や川や家や森やいろいろなものに名前をつけ、おれたちだけの地図をつくったんだ。「忘りよったか。しょうないやっちゃな」

その時おれたち三人の真ん中に、空から何か落ちてきた。おれたちはびっくりして、わ！とか、を！とか、思い思いに叫んで飛びすさった。それはがらんごろごろと派手に音を立てて転がり、やがて止まった。やかんだった。最初からへこんでいたのか、落ちた衝撃でへこんだのか、ぶさいくにゆがんだアルマイトのやかんだった。ラグビー部が命の水とか呼んでありがたがりそうなやかんだった。

「こわれたやかんや」金森が口を開いた。「そうや、こわれたやかんや」

そう。それが、山につけたおれのあだ名だった。おれたちは茫然とやかんを眺めていたが、不意にべらぼうにおかしくなって来て、三人で腹が痛くなるくらいまでげらげらと笑った。

バスが来て、金森が乗る時も、おれたちは笑いが止まらず、別れの言葉を言うどころではなく、とにかく手を振って挨拶をした。湿っぽいことを言わずにすんで、良かったと思う。バスが走り去ってしばらくも西倉とおれは笑い続けていた。それから先に冷静になった西倉がようやくしゃべった。

「で、どうすんねこれ」

おれはかがんでやかんを拾い上げ、蓋をちゃんとのせてやり、バス停のベンチにきちんと置くと、真面目な声で言った。

「次の夕立ちでどっかいくんやろ。次のに乗って」

(「こわれたやかん」 ordered by たいとう-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひよっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

条

<http://p.booklog.jp/book/45830>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/45830>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/45830>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.